

---

# 猫と魔術と学園と

佐々倉弥生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫と魔術と学園と

### 【Nコード】

N1288BA

### 【作者名】

佐々倉弥生

### 【あらすじ】

魔術、異術、妖術が奨励される岸陀嶺地区<sup>がんだれ</sup>。そこに住む少年、星影七宝のもとにある日猫の国から王女様がおしのびてくる。ハチャメチャな王女に町はさあ大変！

ぶろろーぐ ねこがきた！(前書き)

初めてのオリジナルです。

楽しんでみてくれたらうれしいです。

ぶるるーぐ　ねこがきた！

僕は休み時間、窓際の席でポーツとしながらコスモスの花びらを宙に浮かばせて遊んでいる水色ヘアの女子のところへ行き、唐突に話しかけた。

「お前の名前ってさ、変わってるよな」

「そう？　おおたがきはじき太田垣蓮月だよ、普通じゃない」

「十分変わってるよ」

「“おおたがき　はづき”……やっぱりなんともないわよ」

「いやいやいやいや、それ、江戸時代あたりの女流歌人の漢字だろ！？　昨日、テレビ（視聴者の骨董品鑑定するヤツ）見てたらお前と同じ名前が出てきて結構ビビったぞ？」

「あー、そういえば父さんが随分前に歌人の漢字をとったって言うってたかもしれないわ」

「だろ？」

「でも、まあ、そう珍しくもないわ。最近大和日本風の源氏名をつけるのが流行りだもの」

……まあ、そうなのだが……。

「本名は一生隠すからどうでもいいけど、源氏名は一生それで呼ばれるから、みんな真面目に考えるのよ」

補足しよう。

僕や蓮月の住む岸蛇嶺がんだれ地区は「危化学研究政令特区」と呼ばれ、沖縄本島くらいの大きさの大都会である。この地域では“宇宙開発”と、“危化学”という分野の研究が奨励されている。

危化学とは、一般の物理法則では成り立たない例外原子イレギュラーを元とした新しい分野で、これは俗に、魔術や超能力などと呼ばれていた超現象の存在を証明したものである。危化学は発見される前までの人間の常識を真つ向から否定し、また、それはとても危険なシステム

を使用するため、社会が混乱すると考えた政府は危化学推進都市、岸蛇嶺地区を制定し、その区域内でのみ危化学物理システムを実用化した。

現在、岸蛇嶺地区には約300万人が住んでおり、その大半が技術者、研究者とその家族、または学生で、それらで約95%を占める。

ここに住む学生達は、試験的に、危化学を中心とした教育がなされている。安全が確立されてはいないものの、実用化され、一般人が危科学に関わることができるのは、全世界で有一、岸蛇嶺地区のみのため、ここにある学校への進学希望者は後をたたない。

危科学では“名前”が重要で、全ての術は名前及び名称が必要。だから、催眠や服従等の術は名前が知られないかぎりかかるとは無い。だが、裏を返すと、名前が流出したそのときはその人物の命、身体は、もう無くなったも同然だ。そのため、個人情報の流出を避け、岸蛇嶺地区の住民は出生時に本名と源氏名をつけるのである。本名は本人と両親しか知らない。いざというときまでとっておくのだ。

僕が所属するのは『しりつほつかいきたかくえん私立宝魁喜多学園』、玉雷市にある、地区内有数の私立高校だ。

地区外の学校と違うところは、理数科目の内容が大幅に違い、それにプラスして危化学の科目があるところだ。クラス編成は危化学のそれぞれの素質で分かれる。大きく分けて、魔術、異術、妖術の三種ある。それぞれ三学級ずつ、一学年に九クラスある。ちなみに僕や蓮月がいるのは『魔術S昂』クラスだ。それぞれ個性のある魔術を使用するが、だいたいここには風の神の魔術を得意とする者が多い。

そして目の前にいる女子、蓮月。つり目だが別に性格は悪くない。髪は珍しいきれいな水色でいつもワンリングスのマッシュルームを少し長くした髪型をしている。普段は前髪で見えないがおでこに傷

跡がある、のは内緒だ。彼女に対しては高校生にしては大人っぽい印象を受ける人がほとんどだ。確かに身長が高くスタイルもそこそこ良いのももちろんあると思うが、彼女の境遇とか、そんなものが蓮月をそう見せているんだと幼なじみで腐れ縁である僕は考えている。

「…で？」蓮月が話を振ってきた。

「なんだ？」今変な事なんか考えてないぞとくに。「あなた、私の名前の悪口言うためにわざわざここへ来たんじゃないんでしょ？」

「ああ、もちろん。訊いって話があるんだ」

「何？」

「あのさあ……………」僕はなぜか言葉に詰まってしまった。なんと言つべきか分からない。

「ええつとだな……………」お前、童話って信じるか？」

「童話？ あかずきんとか、シンデレラとかってアレでしょ。妖術を使えば実現可能よ。ものによってはね」

だから…そうねえ、と蓮月。

「信じるわ。大方……………あなたのその様子だとまた何かあったんでしょ」

また？ 『また』って何のことだ？ 前にお前になにか相談したことあったつけ。まあ、いいや。

「急用ってほどでもないんだけどな、何か起こったのは確かさ」

「ふうん。グリム童話かイソップ童話の世界に入りこんじゃいましたーとか？」そうやって蓮月はやりと美人顔を歪める。

「そしたら、僕がここにいるわけないだろ。それに、そもそもそんなことってありえるのか」

「さあ？ どうなんだろうね」

そのそっけない返事になぜか違和感を覚えた。いつもなら答えをさらりと述べて得意げな顔を見せるのに。

「お前にも分からないことはあるんだな」

「私をなんだとおもってるのよ、当たり前じゃない」

僕はなぜか拗ねてしまった蓮月を偵して言った。

「じゃあ、放課後に手を貸してもらってもいいな？」

「まだ、何をしてほしいのか全く聞いてないのだけど」

しかたないわね、と蓮月。

「いいわよ。付き合ってあげる。今日は何も用事ないから」

「放課後、学校の裏口で待っていてくれ」

蓮月は返事の代わりに鼻をふん、と鳴らした。

「……で、何だっというのよ？」

放課後である。蓮月は仁王立ちで今にも持っている鞆を投げつけてきそうだ。ああ、怖っ。

「助けがいるから来てくれって言っただのはそっちじゃない。なんで四時間も待たなきゃならないのよ……」

「ブツブツブツ……」。  
周りに人影はない。陽もドッキリ暮れて生徒は皆帰宅したのだろう。

「……見てくれよ、こいつ」

僕は手を差し出す。

「……猫？ ただの」蓮月は変な顔をする。……と、すぐに怖い顔に戻る。

「ただの、猫ではないよ、多分」僕は小さな獣を見ながら言う。

「蓮月にも挨拶してくれないか、猫？」

猫……シンガプーラという種類らしい、グリーンの目をしたセピア色のそいつは、蓮月をうかがわしげに見つめ、ぱっ、と僕の方を睨み、口を開いた。

「アタシには《テイク・ジヨハン＝モデレート18世》という名があるんや、ボケ。（蓮月の方に振り返り）……お主、かぁいいいな、雇ってやらぬこともないぞ、アタシの城で働かんか。まあ、

アタシの方が281倍かぁいいけどな」

「結局そいつはなんなのよ……？」蓮月、気にすんな。

「僕もさつききた。メイリン王国、あ……猫の世界の国の女王様、らしい」

からかつてんの？ という表情の蓮月。辺りはしんと静まりかえり、どこかで犬の遠吠えが聞こえる。

「朝、登校中、歩いていたら後ろからこいつがついてきたんだ」僕は最初無視していたんだが、ぴったり後ろを歩いてくるのでどうしても気になってな。声をかけた。もちろん、返事が返ってくるとは思わないさ。だがこいつはしっかりと、「友達になって下さい」って言ったんだよ、口に発音して。ふざけんな。耳までおかしくなったのかと思った。

「もともと星影の目はおかしいもんね」ニヤけんな。不気味だぞ。「んで？」蓮月は続きを促す。

あ……それで、話を一通り聞いて、どっかの世界の王女さんが社会勉強に来たらしい。。って所に僕の考えは落ち着いたってわけだ。

「その女王猫、私に押しつけようっていうんじゃないでしょうね？」

「……俺ん家は親がペットにうるさいし、そのつもりでよんだんだけど……」

蓮月は口元で何か唱える。呪文か？

バヒユウンツ！

突風がふき、風に僕の身体は吹き飛ばされる。

ゴンツッ！！ 背中から近くの大木にぶつかった。超痛え。

「っ……。そんなに三時間待たせたことに怒ってんのかよ!？」

「馬鹿、四時間半よっ」蓮月はこっちへ歩きながら言う。軽く二十メートルは飛ばされたんじゃない……。

「大して変わんねえよ、っーか、わざわざ”術”使う事ないだろ……」と僕は言っただけ上がる。



蓮月は僕等《風邪使い》<sup>フウジャ</sup>の中でも学生とはいえトップクラスの力量を持つ。物体（例えば俺）をいとも簡単に運んでしまう。ある意味何気に危険人物なのだ。

連月は頬を赤くしてそっぽを向いていた。実は案外その顔も可愛かったり……し、しっない、しない！ うん。

「はあ、何か言わないとまずいよな……。僕は少し考えた挙げ句、……俺が悪かったよ、冬空の下でわざわざ待たせて」と言った。「ごめん」

「っ！？ なんだよ、あらたまつて？ 私は別に……」蓮月が赤くなっているのがここからでも分かる。

「やべえ、きまずい……。と思ったのも束の間、ご機嫌ナナメの王女様が口をはさんだ。ああ、いたんだ」。

「にんげんつてたいくつな生き物なのねえ。なあ、七宝<sup>しちたか</sup>、アタシを城<sup>いえ</sup>につれて参れ、喉が乾いた」

「お前に人間の何が分かんだよ？ と吐くのはさすがにやめた。星影七宝は俺の表向きの名前だ。本名？ そんなの死んでも言えない（笑）」

「じ、じゃあ、俺こいつ連れてなんとかがんばってみるわ、ハハハ」

「親が駄目なんじゃないの？ 星影のお母さんて恐ろしいって噂だけだ」

「なんだよその噂。残念な母親だな、おい。」

「ああ？ うちのお袋が怖い分けないだろ、ははははは。怒ったら火のついた七輪と共に密室で一晩ねかされるていどかな？」「たいたしたことないさ、僕にしてみれば。」

「いやいやいや！？ それ、確実に危ないよ？ 確かに星影も変

わった人だけど、星影母も、とは……」

変わった人……ねえ……、ってそれじゃあ僕変人みたいだろ!?

「少なくとも普通のにんげんではないだろ」「うるせえ……って、チビ猫か、こんどは。」「私帰るね、それじゃ、また明日」「なんだか唐突だ。」

「ん？ ああ、じゃあな」

蓮月はそそくさと駆けていった。用事でもあるんだろうか。

ふう。寒い。帰るか。

冷たい風が頬を伝う。

「冬……なんだな」初めて実感した。

「ふゆって何？ 食べられりゅんの？」

ふっ。お前って何なんだろうな。

俺は目の前の闇に浮かぶ月を従え、奥へ奥へと進んでいった。

家はもうすぐだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1288ba/>

---

猫と魔術と学園と

2012年1月3日03時50分発行